

久保田淳他著

『古典文学に見る吉野』

佐藤信一

本書は吉野の桜の保護のためのトラスト運動の一環として催された講演会の記録である。片桐洋一氏「歌枕・吉野」、久保田淳先生「西行の世界」、井上宗雄氏「南北朝動乱期の文学と吉野」、島津忠夫氏「吉野と芭蕉」からなる。

片桐洋一氏の「歌枕・吉野」は歌枕一般の概念規定から始め、「万葉集」や「古今和歌集」での歌枕としての「吉野山」の詠まれ方を比較しながら、「桜」と「吉野山」を関係づけた存在として西行の役割を重視する。

久保田先生の「西行の世界」は西行の吉野の歌を検討し、西行の歌が実際に吉野の地を訪れていた、「実体験を踏まえた」詠歌であることを論じる。吉野とは西行にとって「憂き世から身を隠すべき場所」であり、「精神的に深い場所」でもあった。また大和を詠んだ歌では俊成の貴族的美意識に比べて「風景というものが漠然としていなくて、克明に、いかにもその情景が思い浮かぶような形で描き出されている、これが西行の非凡な所」とされる。ただ実際には西行の歌の世界は吉野や大和を詠んだものだけではない。農民や漁民、源平の争乱をも詠む。久保田先生によれば「西行の世界にはそういう毒を含んだ歌と、ひたすら、吉野の花を讀えた美しい歌、そういう歌が同居して

いる」のである。そういう西行の世界を味わうためには、すべての歌、一首一首を讀む必要がある。

井上宗雄氏の「南北朝動乱期の文学と吉野」は、「大平記」の「吉野」には花の趣は見られないことを指摘した上で、南朝歌壇の歌人達による「新葉集」に現れた中世和歌の「吉野」の世界を明示する。

島津忠夫氏の「吉野と芭蕉」は「笈の小文」での芭蕉の吉野吟を検討して、芭蕉が発句に吉野を詠じなかつた経緯を明らかにする。

本書の表題は「古典文学に見る吉野」であるが、各々の論文の目指す所は単に吉野に収斂するものではないように見える。そうした中であつて久保田先生の西行論は西行を論じるに当つての、のみならず作品と向き合う際に私達が取るべき基本姿勢を明らかにされているように思われてならない。

(平成八年四月十五日刊 四六並製 一五三ページ 和泉書院)